
ベンリ屋 翔

二階藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベンリ屋 翔

【Nコード】

N9310B

【作者名】

二階藤

【あらすじ】

隣街にあると言う廃ビル：変な噂があるその廃ビル付近で、行方不明者が出たらしい。そんな話を聞いている矢先、その事件の被害者の関係者が事務所を訪れて…。

プロローグ：依頼人来る

「ねえ、聞いたかい？」

開口一番に何を言い出すかと思えば、いつものくだらない話だった。「くだらないはないだろう？」

せっかく、面白そうな話を持ってきたのに……」

その、お前が言う、面白い話の中で、俺が面白いと思ったことは、一度としてない。

「ん……僕としては、面白かったんだけどね……？」

そりゃ、お前がいつも傍観者側だからだろ？

一度、当事者側に回ってみろ……一つも面白いことなんてないんだから……！

「見てるのが楽しいんじゃないか……で、今回の話は、聞いてくれるのかな？」

どうせ、いつものように、聞かなきゃ、いつまでも居座る気だろ？

……それは、迷惑極まりないから、言う事言って、とっとと帰ってくれや。

「ま、聞いてくれるってなら、話は早いや。

あんた、隣街にある、廃ビルの噂って知っているかい？」

ん？なんか、幽霊が出るとか、行方不明者が出たとかってやつか？

「そう、ソレ。

実は、2～3日前に、本当に出ちゃったらしいんだよ……」

幽霊がか？

「いや、それは確認されていないみたいだね。

出たっていうのは、行方不明者のほうさ」

……なんで、お前が得意そうに言うんだ？

……ん？そういえば、この間のラジオのニュースでやってた隣街での行方不明者って言うのは……？

「そんなニュースを聞いたのかい？……まあ、その通り、廃ビルの辺

りで見かけたのを最後に行方不明って話だよ」

それは、それは…。

…で、そんな話を俺にして、何が面白いって言うんだ？

「おいおい…あんたが今まで見て来た事件は、殆どがこの類だろ？

…つまり、今回も、あんたのところに仕事に来るって事さ…」

…やれやれ…。

そうそう都合よく仕事がくるわけ…

ピンポン…

インターフォンのなる音と、どうやら、俺を呼んでいるらしき声が聞こえる…。

全く…こいつと関わっているとろくなことが起きない気がしてならないね…。

とりあえず、こいつが言ったようなことが起きないことを願うとするかね…。

「お待たせしました…どうぞ」

そう言って、俺は、入り口のドアを開けて、やってきた客に愛想笑いを振りまく。

営業スマイル…コレこそが、接客業の基本中の基本だ。

「さて…今日は、こういったご用向きで、当事務所まで来ていただきましたか？」

ある意味で、定型句となりつつある、その言葉で客の出方を窺う。

相手は、20代半ば位の女性。

カジュアルな服装をしていて、身なりは結構きっちりしている感じが…？

普段はOLしていますといわれても…まあ、驚きはしない感じだが…学生だとしたらそれはそれで驚くかもしれないな…学生っぽくは

無いし。

少し伏目がちにその女性は口を開いた

「実は…」

と、女性の前を横切る黒猫。

「あ、猫ちゃん…ここで飼っているんですか？」

俺は、首を横に振りながら答える。

「勝手に出入りしていくんですよ…特に、お客が来るようなタイミングを見計らうかのように…っと、それはそうと、ご用件の方は？」

「あつ、そうでしたね…あの…少し変な話なんですけど…聞いてください」

…変な話？…ひょっとして…。

「隣街に廃ビルがあるって言うのはご存知でしょうか？」

…来た…あいつの言っていた話がまんまと舞い込んできた形になってしまったか…。

そう思いながら、客の周りをうろうろとしている黒猫を一瞥してから、答える。

「ええ…何でも、奇怪な噂がある、あのビルですよね？」

「あ、ご存知でしたか…じゃあ、先日起きた事件のお話は…？」

…あいつの、思い描いた通りの展開…ってやつか…やれやれ…。

「確か…2～3日ほど前に、隣街で、誰かが行方不明になった…っていう事件ですね？」

ラジオで聞いて知ってはいましたが…何でも、最後の目撃情報が、そのビル付近だとか…？」

女性は、その言葉を聞いて、少し驚いたような表情になって、

「えっ！そこまでご存知だったんですか…？」

…じゃあ、今日ここに来た理由っていうのも…なんとなくお察しかと思いますか…」

…人探し…か？…とはいええ、色々と厄介ごとを背負うことになりそうだな…。

まあ…それも仕事のうちだ…仕方ないか…。

「貴女は…行方不明になった方の身内の方ですか？」
女性は、更に伏目がちになり、

「…行方不明になったのは…私の婚約者です…」
押し殺すかのような声で、それだけ言った。

1章：調査・廃ビル

依頼人の女性が帰った後、話しかけてくる声に耳を傾ける。

「さてさて：早速、事件が舞い込んできたな？：どうする？」

：全く：舞い込んできたものにも：お前の仕込みじゃないのか？

：と、そんなことを考えても何にもなら無いな：。

「まあ、そういうことだ：で、あんたはどう思うんだ？」

さあな。

行方不明者が出ただけなら、警察に任せるのが一番手っ取り早いんだが、

わざわざ、こんな事務所まで訪れたんだからな：一言で言えば：藁にもすがる思いってやつか？

「だろうな」

女性が話したことを要約するなら、

「婚約者が例の廃ビルの付近での目撃を最後に行方不明になった」

「警察に掛け合い、搜索をしたが、行方不明になった形跡は見つからなかった」

「最後の目撃情報の少し前に、女性に婚約者からのメールが入った」

：最後のメール：って言うのがちよつと引かかるな。

メールの内容は：律儀にも、携帯に送られたメールをプリントアウトして持ってくるとはね：。

結構、几帳面な性格なのか：あの女性は。

『今、隣街の廃ビル近くにいらんだが、トラブルに巻き込まれた：今日は帰れそうに無い』

：との事だ。

たったコレだけの文章を：プリントアウト：ねえ：ご苦労なこった。

「：で：どう思う？」

うーん…わからんね。

証拠らしい証拠が、このメールだけじゃあね。

…てか、お前…この廃ビルの事何か知っているんじゃないのか？

「まあな…あの変は、僕の縄張りの一部だし、仲間もあの辺りをウロウロとしているし」

…だと、思ったぜ…行方不明になった直前と直後のことだって…本当は知っているんじゃないのか？

「ははっ、いくらなんでも、僕の持つアンテナはそこまで優秀じゃない。

まあ、仮に知っていたとしても…すぐに、あんたに教えると思うかい？」

…まあ、いつものお前なら、散々引っ掻き回すよな…全く。

とりあえず…現場に行ってみるしか手立ては無いのか…やれやれだ…。

お前は、今回はついて来るのか？

「僕？…あんた…廃ビルの場所って知っているかい？

知らないんなら、そこまでの案内役としてついて行ってもいいけど？」

そうだな…おおよその場所くらいは聞いたことあるけど…正確な場所には知らないしな。

お前のことだし…現場に着いたら、さっさと姿をくらまして傍観者を気取る気だろ？

「よく解っていらっしゃる…傍観者が、僕の一番好きなポジションだからね。

じゃあ…とりあえず、隣街の廃ビルまで案内しようか…」

仕方ない…コレも仕事だしな…よろしく頼む。

隣街までは、車で10分ほどの距離だ。

問題の廃ビルは、こいつの話が正しければ、車では入れないところにあるとか…。

全く…そんな立地の悪いビルなんか、廃墟になって当然なのかもしれないな。

「そうかもしれないな…まあ、廃れたビルのことだ…とやかく言うのはやめようぜ」

同意だな…目下のところ、事件解決をめざすべきだしな。

有料駐車場に車を止め、更に歩くこと数分。

問題のビルに到着した…廃ビルって割には、結構きれいなじゃないか？下手したら、俺の事務所の入っている建物よりも…だ。

「あのビルは、手入れがなっていないからな…それに家賃も安い」全く持ってその通りさ。

お前が、居座る時間が長くなればなるほど、俺のところに入る仕事は、

奇怪な仕事になるし、巷じゃ、そういうの扱っている事務所って呼ばれてるんだぜ？

「僕のせい…と？

もともと、あんたには、この類の事件を呼び寄せる習性でもあると思うね…。

実際、僕もあんたの事務所に引かれて、出入りするようになったんだし」

…近々、あのビルから撤退して、別のところで事務所を構えることにするさ…。

そうすれば、奇怪な事件と遭わないで済みそうだしな。

「ははっ、それは、多分無駄に終わるだろうね。

習性自体は、あんたにあるんだから」

…やれやれだ。

ビルの概観は、地上4階建てで、見た目も誰かが住んでいてもおかしくない位だった。

恐らく、廃れた理由は、その立地のせいでは無いかと容易に想像で

きた。

「聞いた話だがな：建てられた当初は、そこそこテナントも入って賑わっていたそうだ。

だが、ビルのオーナーが代わった頃合から、少しずつテナントも離れて行ったんだとさ」

へえ：誰から、そんな話を聞いたんだ？

「企業秘密だ：まあ、僕の友人：といえば伝わるか？」

まあ、無駄に交友関係の広いお前だからな：そんなこったろうとは思ったさ。

で、何故ビルのオーナーが代わった頃合からなんだ？家賃でも引き上げたか？

「さあな：家賃自体は、多少『引き下げた』らしいんだ」

：下げた？：利用者にとっては喜ばしいことじゃないか？

「至極その通り。

だが：結局は、廃れたんだから：もっと、別のところに理由があったんだろうさ」

家賃以外の理由：：かあ：。

ん？そういえば、その代わったって言うオーナーはどこにいったんだ？

「：行方不明：って話だ」

廃れたビルに、行方不明のオーナー：：で、噂される奇怪な話：：かあ：。

：とりあえず、当時入っていたテナントについて分かれば、もう少し何とかなるか。

「それは：多分、無理な話だな」

：なんでだ？

「当時入っていたテナントの書類は殆ど偽造のものだったらしい。

新オーナーが行方不明になった後に、このビルの調査に来た警察が、そのことに気づいたらしいから：まあ、ほぼ間違い無いだろうな」

：奇怪なことが更に増えるだけの結果：：かあ：。

で…その警察からの情報っていうのは…、
「企業秘密…だ」
だろうな。

2章：廃ビル・その出来事

企業秘密の多いいつから得た情報を整理してみるか…。

「オーナーが代わった頃から、廃れ始めた」

「オーナーが代わって、家賃等は、『引き下げ』られた」

「前オーナー時代に入っていたテナントの書類は殆どが偽造」

「現在のオーナーは行方不明」

：コレだけみると、どうも、前オーナーが何かを知っている気がするのだが…。

「あんたも、そう思うか？」

結論から言うと、前オーナーはシロ…だそうだ」

その言葉は…どれくらい信じればいいんだ？

「あんたに任せるさ」

何で、シロだって言い切れるんだ？

「全く…教えてくれ君は、嫌われるぜ？

：まあ、本当は企業秘密なところだが…順序だてて教えてやるよ」
それは、ありがたい話だ…で？

「そう、急くなって。」

まず、前オーナーがシロの理由だが、実は、前オーナーは名前だけのオーナーだったっていう話だ」

…名前だけ？

「ああ、つまり、このビルを所有しているが、実際に管理したりしていたのは別の人間だったらしい」
…なるほどな…。

「で、どっちかというと、この管理している人間の方が問題だったらしく、

警察とか、関係者は、殆どがそっちに出張った…ここまでは分かるか？」

…俺を馬鹿にしているのか？

ん？待てよ…だとすると、その管理者が、一連の事件の関係者か？

「直接的には、シロだ。」

ただ、管理体制の問題点などを考えれば…間接的にはクロだな」

…つまり、その管理者が、直接何かをしたのではなくて…第三者がこの事件の関係者…ってか？

「まあ、そういうことだ。」

管理者は、利益の追求のみを優先させていた為、偽造の書類と承知の上で、

払いの良い、テナント利用者を受け入れていたらしい」

なるほどな…だが…そうすると、何故、オーナーが代わる必要があったんだ？

「前オーナーは既に亡くなっている」

…亡くなっている？

じゃあ、オーナーが代わった理由って言うのは…。

「まあ、そういうことだ。」

更に言うなら、代わった後のオーナーは、前オーナーの遠縁の人間だったらしいんだが…、

双方に面識はなかったんだとさ」

…まあ、こんな場所のビル…誰も管理したがないな…。

で、何でまた、代わることを承諾したんだろうな…。

「ん？ああ、確か、仕事をクビになって、退職金こそ多少出たが、時間は有り余っていたらしい…で、白羽の矢がたったんだとさ」

…今日は、ずいぶんとサービスがいいな？

事件の真相も、既に知っているんじゃないのか？

「それは…どうかな？」

まあ、僕が知っていても、教えるわけが無いし、

何よりも、面白くない…というよりも…いつまでここに居る気だい？」

確かに…ここにいても、手がかりらしいものも無いしな…。

というより：ここまで来る必要はあったのか？

事件の概要どころか、関係者関連もお前の頭に入っていたとなると：事務所でも良かったんじゃないか？

「ははっ、そりゃそうだけど：面白く無いだろ？」

それに、現場にも行かないで、解決した事件を誰が信じる？」

ごもつともだ：とりあえず、ここには何もなさそうだし：事務所に戻るぞ。

「その前に：何か食べていらないか？」

：ここまで来たのも：それが狙いか：？

「いいじゃないか：案内までしてやったんだし」

ったく：コンビニで適当に買って帰るぞ？

とりあえず、今回の事件：もうちょっと調べられるところもありそうだしな。

「また、コンビニか：あんまり品揃えがよく無いんだよな：もう少し大きいところなら：」

あんまりぶつぶつ言うなよ。

事件が解決したら、なんか買ってやるから。

「まあ：それで我慢してやるか：」

3章：事務所にて。

「で：調べられることって言うのはなんなんだい？」

ん？：ああ、コレをみてもらえば、少しは分かるかな？

「：？あの、廃ビルの前オーナーによく似た絵だが：それはどうしたんだい？」

やっぱりそうか：不意を付けば、お前の口からもそういう答えを聞けると思ったよ…。

この人相書きは、廃ビルで幽霊を見たって言う人の記憶を元に書いたものさ。

「へえ～：見た人がいたんだ：ということは、僕は、失言したってことか」

まあ、そういうことになるな。

で：代わった後のオーナーについても、依頼人から、写真を預かっているから、

それを元に探せばいいんだが：一つ聞いて言いか？

「なんだい？：答えられることなら、答えるけど：」

前オーナーは、本当に亡くなっているだよな？

「：信用するかどうかは、あんたに任せるといったと思ったけど？」
了解、その言葉が聞ければ十分だ。

前オーナーが生きていた場合は、色々と話がややこしくなって良くないからな。

「ほう：じゃあ、何か分かったって言うことか？」

ああ：っと、その前にもう一つ：お前のお仲間で、あのビルの中に入ったやつっているか？

「あの廃ビルに？：確か、いなかったはずだね：好んで入るような場所でも無いし」

うん、じゃあ、あの廃ビルには、幽霊と行方不明のオーナーの両方がいる。

「へ？」

まあ、人相書きが、前オーナーのものであるということが大前提だけれどな。

とりあえず、明日にでも、依頼者を連れて、一度あの廃ビルに言うておく必要があるな…。

「依頼者を連れて…ねえ…事件の真相が解ったって言うことで…いいのかな？」

うーん…まあ、そんなところだけ…ただ、お前の言う「面白い」って言う展開は、まず皆無だろうな…というより…そうなることはおまえ自身が解っているか…。

「ははっ、何のことだか…まあ、僕としては、こういう事件の解決の為にあんたがあれこれ考える姿が面白いから、面白いといっているだけなんだけどね」

ははは…全くいい性格しているよ…お前は。

「それはそうと…腹減ったんだけど…僕の食べ物は何？」

ああ…用意してやるから少し待っているよ。

「用意するって言っても、皿に移すだけだけどね」

そんなこといっても、お前自身は、皿に移すことすら出来ないじゃないか…。

「それは、最もらしい意見だ…じゃあ、とりあえず、それ食べ終わったら、今日はお暇するよ…明日は、何時ごろに来ればいいのか？」

さあ…できれば、来てくれなくても良いんだが、依頼人の人は、午前中にでも来てもらおうようにするつもりだが…？

「ふーん…じゃあ、朝一番で、起こしに来てあげるよ」
いらん世話だな…。

「まあ、そういうなよ…どうせ、早起きなんていうものとは無縁だろ？…依頼人が来る時くらいは早起きしていてもよさそうなものさ」
まあ…そうだな…と、コレが、今日の働き分だ。

「はいはい…ありがたく頂戴しておくよ」

ところで…一つ聞いても良いか？

「一つだけならね…」

何で、俺のところに来て、あれこれと世話を焼こうとしているんだ？
「うーん…まあ、からかうのが面白いから…って言うのじゃ駄目？」
答えとしては、最悪だな…探偵事務所ならいくらでもあるじゃないか。

「言ったら？あんたには、変な事件を呼び込むような…体質がある
って…で、そういう体質であるって言うのが視えるんだから、付き
まどっていた方が面白い事に当たるしね」

ふーん…で、お前のその姿の意味は？

「一つだけだろ？そうでなくても、最初の答えが不服みたいだから
ちゃんと答えたんだしね…その質問はまたの機会に…だね」

ふう…了解したよ。

そのうち、ちゃんと教えてもらうからな？

「そのうちね…じゃあ、ご馳走さま…また明日の朝ね…寝てたら、
引っ掻いてでも起こすからよろしく」

全く、脅しか何かかよ？…ま、その際は顔は遠慮して欲しいな。

「考えておくよ…じゃ」

ああ。

4章：依頼人、再び。

「あんた…やっぱり朝は弱いみたいだな？」

その声で、目をぼんやりと開けてみようとしたが…瞼が上がらない…。

どうにも、顔に何かが乗っているようだ。

…お前な…起こし方にも色々あるだろうが…。

「叩いたりする程度では起きないと思ったからな…まあ、サービスだ」

丁重にお断りさせてもらう…そういうサービスは。

とりあえず、どいてくれないと、起きることすら出来ないんだが…？

「おっと、それは悪かったな…今どけるからちよつと待ってくれ」

朝から、とんでもない起こし方は、遠慮願いたいね…。

「引っ掻かなかっただけ、ありがたいと思って頂きたいね」

はいはい、ありがとよ…。

「で、依頼人は、いつ頃来るんだい？」

えっと…後、30分程だな…ちよつと着替えるから、その間にこいつを見ておいてもらえるか？…お前の意見が聞きたいからな。

「ん？これは…何の図面だい…？」

例の廃ビルの図面さ。

「へえ〜！よく、そんなものを持っていたね？」

持っではないさ…昨日、お前が帰った後に入手した。

「昨日？でも、たいして時間は無かったと思うんだが…どうやって手に入れたんだい？」

そいつは…企業秘密ってやつさ。

「ははっ、企業秘密か…それじゃあ、突っ込んだ質問をするのは野暮ってもんだね」

まあ、そういうことにしておいてくれ…で、それを見てどう思う？

「うーん：なんともいえないけど：あのビルって、地下があっただね：表からは分からなかったけど」

そうなんだよな：で、よく見てくれ：その地下から、表に直通で出られるルートが：ここにある。

このルートを辿ると、少なくとも、ビル周辺を徘徊するような人間と接触することなく、表の人間と接触することが可能になるんだ。

「へえ：あのビルって、そういうつくりになっていたんだ：ん？でも：このドアのところの書き方だと：って、あんた、もう着替え終わったのか？」

まあ、着替えるって言っても、ズボン替えて、シャツ着ただけだからな：わざわざスーツとかまで着込む必要も無いだろうしな。

「最もな意見だね」

で、お前が思っている通り、ここの表と繋がっているドアは、中から出ることが出来るが、外からは入ることが出来ないような構造になっている：らしい。

「ふーん：てことは：中に住み着いても、外部と最小限の接触だけで生活できるって事か：流石に、そこまでの情報は無かったなあ：僕のところにも：」

まあ、情報源が違うからな：。

「で：ここまで分かったということは、行方不明になっているって言う人は：」

多分、あのビル内にいるんだろうな。

事務所に、来客を継げるベルの音が鳴り響き、俺は、事務所ドアを開ける。

「こんにちは：あの：あの人の行方は分かったんですか：？」

「ええ：予測の域を出ないところはあるんですが：貴女は、例のビルには行ってみましたか？」

「：ええ：行っただけですけど：元々、無人のビルだったので：ちょっと怖くて：」

「中までは…確認をしていないということでしょうか？」

「…はい」

…この辺までは、おおよそ予想通りだな…あのビルの中に入って、人の有無を確認した人間は、多分いない…いるとして、警察関係だろうけど…それを考えれば、警察の方が、彼女の依頼を断った形になった事も予想できるな…。

問題は、行方不明の報道後のニュースなのだが…俺は、そのニュースを見ていないんだよな…。

「話は変わりますが…例の行方不明のニュース後の続報については何か見ましたか？」

…生活スペースともなっている事務所にはラジオ以外存在していないし、それすらもまともに動かしたりしないしな。

そもそもの情報は、あいつから聞いたものだ…。

「えっと…そういうえば、気が気じゃなくて、テレビとか…全然見ていませんでした…」

…ひょっとすると…悪戯でしたとか、勘違いでしたとか…そういうった類のニュースが流されていたかもしれないが…地方で起きた事件だし、大々的に取り上げるようなことは無いか…。

「警察の方への連絡は？」

「一応…搜索願も出そうと思って相談したのですが…無駄になるだろうって…そういうわれました」

…決定的だな…警察の方は相応の事情を知っている可能性が高い…問題は、何で婚約者って言う立場なのに、姿をくらませた状態を維持しているのかって言う話だな…。

「あの…」

おずおずとした声で言ってきたので答える。

「どうかしましたか？」

「猫ちゃんが…なついてしまったんですが…」

良く見たら、黒猫が対面で座る女性のひざの上に居座っている…いい気なもんだな。

「まあ：放っておけばそのうち、どこかに行きますから：しばらく我慢してください」

「：分かりました：」

：どことなく、嬉しそうに見えるのだが：この人は猫好きなのかね？：ろくでもない奴なのだが：。

「さて：とりあえず、事情は移動中に話しますので、例の廃ビルに行ってみますか？」

「え？：：やっぱり、あのビルに何かあるんですか？」

「：ええ：恐らくですが：」

そう言いながら、女性のひざを独占していた猫の首根っこを掴んで引き上げる。

「フギャーッ！」

不機嫌そうに鳴くが：まあ、気にしないでも良いだろう、どうせ、こいつも連れてビルの方に行くのだし。

「あれ？その猫ちゃんも連れて行くんですか？」

「ええ：下手に事務所に置いて行って荒らされても困りますし、元々、隣街の野良ですから」

後半は、結構適当なことを言ったが、実際、こいつを事務所に放置して荒らされたことは何度かあったしな：。

「では、参りましょうか：？」

そう言って、事務所のドアを開けて、表に止めてある車に乗り込んだ。

5章：廃ビル・行方不明者

2日連続で、この廃ビルに来ることになるとはな…。
まあ、ここに来るのも、今日限りにしておきたいものだね。

「とりあえず、正面から入ってみますか？」

そっぴいながら女性とビルの正面へと向かう。

道中、このビルについて、女性が知っていると照らし合わせながら会話をしていたのだが：どうやら、前のオーナーがなくなっていること以外は殆ど知らない様子だった。

一応、地下があることはそれとなく伝えたのだが、外に出るためだけのドアがある事については伏せておいた。

「正面から：ですか？：誰かがいるのでしょうか：」

まあ：その疑問も当然か：俺自身も、このビルの中に人がいるかどうかには、100%の確証を持っているわけでも無いからな。

「誰かがいるかもしれませんし：いたら、それはそれで良い事だと思えますよ」

「：そうですか？：わかりました」

ビル正面に備え付けられていた、インターフォンを押してみた：が、反応は、無し。

何度か押すものの、反応が無いところから、このインターフォン：使えないんじゃないのか？

って言う疑問すら湧いてくるね。

心配そうに、そわそわしたような感じで、俺の行動を見る女性と、その足元でつまらなそうに、あくびをしながら、じっとしている黒猫。

全く：こいつはのんきでいいな。

「反応が無いみたいですネ…とりあえず、こちらに来ていただいてよろしいですか？」

と、あえて黙っておいた、「外に出るためのドア」があると思われるほうに、女性を誘導。

まあ、図面を見ただけじゃあ、正確な位置までわかるわけも無いんだけど…なんてことは無い、

ビルの正面入り口とはほぼ逆側に当たる位置にそれらしいドアがあった。

もうちょっと、ひねった出入り口にすればいいのに…と思ったが、下手にわかり辛くすると、

いざ利用する時に、不便なことこの上なそうだからな…それを考えれば、ここにあるのは…正解なのかね？

「え？何ですか…？そのドア…開くんですか…？」

やたらと疑問符の多い問いかけだね…。

既に図面で見えていたから、開かないだろう事は予測できているけど…なんて答えたものか…。

「このドアは…見てのとおり、ビルの勝手口みたいですネ。

開くかどうかは…まずは、コレを押して見ましようか？」

そういいながら、こっちの出入り口にも備え付けられていた、インターフォンに手を伸ばし、

スイッチを押す…数秒後に反応が返ってくる。

「誰ですか？」

若干警戒交じりの声だったが…どうやら、女性のほうは聞き覚えがあったらしく、インターフォンに詰め寄る…黒猫が「フギヤッ」って言いながら飛び上がったが…お前…何気についてきていたんだな…気づかなかったよ…。

「ねえ！？…山上さんでしょ…山上さんなんでしょ…？」

ん？…そういえば、オーナーの名前…知らなかったなあ…なんで、それに関する情報が無かったんだろう…？…黒猫の方に目をやるが、こっちを見た後、あくびで答える…のんきな奴だな。

「その声…智子か…？…なんで、ここが…」

便宜上…依頼者の女性という感覚で見ていたんだが…苗字は…姉川だったか？

人の名前って言うのは覚えづらくてしょうがないな…猫の方は相変わらずあくびしながらのんきな顔で、傍観しているしな…こいつの名前はなんていうんだっけ？

…まあ、そんなことは結構どうでもいいか…。

「ちょっと失礼…貴方が、現在行方不明といわれている方ですね？」女性が、インターフォン越しになにやら言い合っているのを遮って、インターフォンに問いかける。

「行方不明…？その話は、既に蹴りがついているはずだが…というより…あんた誰だ？」

蹴りがついている？…どういことだ…？？

…事務所で考えていた、「悪戯説」コレが、有力になってしまった…な。

最低限の情報は集められるようにしたいものだね。

「私は、雇われた…探偵みたいなものでして…貴方の行方がわからず、連絡取れなくて困っている…と、そういう依頼を受けまして」

「そうだったのか…俺は、行方不明でも無いし、事情でここから動けないんだ…」

「…警察の方の協力も得られている…ということですね？」

「な…！？…何でそのことを…？」

「まあ…なんとなくですよ…それでは、私はこれで…」

そう言って、何かまだ言いたげな女性を引っ張るようにしながらその場を後にした。

…一つ聞きそびれたな…前のオーナーの姿を見たって言う話…まあ、後で聞けば良いな。

「何で、帰るんですか！？…折角、行方がわかったって言うのに！？」

…女性はそういいながら、怒りをあらわにして、俺に詰め寄ってきたんだが…どうしたものかね…。

警察が、無駄になるって言ったのは、間違いなく、警察と彼の間で何らかの約束事が出来たんだろう。

その内容は、この女性には知られない方がいいし、知られたくない…と。

警察側は、彼の無事も知っているし、何よりも、約束事の手前、最小限の情報しか彼女に与えていない…。

ん？そういえば、行方不明になったって言う話…俺って誰から聞いたんだっけ？？

いつも話を持ちかけてくるあいつと…依頼に来た女性…他には？

「まずは…彼が無事であったということを喜びましょう…ね？」

ところで…彼が行方不明になったという話を聞いたのは…ラジオですよね？」

さっき聞いたのは、「続報を、テレビで見たか？」って言うことだったけど、そもその情報入手先が、テレビなのかラジオなのかを聞き忘れていた…。

全く…ベンリ屋といっても、こういう探偵業みたいなことするんだったらちゃんとしないと駄目だね。

「ラジオ…だったと思います…それが何か関係あるのですか？？」

…ラジオ…ね。

で、俺もラジオで聞いた…。

あいつが持ってきた情報の発信源は何処だったかは…余り気にしないで良いな。

面白そうだからもって来たに過ぎなさそうだ。

「ラジオって、周波数さえ合えば…結構簡単に受信できるって知っていますか？」

「え？…どういうことですか…？」

「簡単に言うと…誰でも、ラジオの放送を出来るということですが…まあ、制限はありますが…」

彼がやることは簡単だ。

彼女の部屋に、ラジオの電波が発生する装置を設置し、偽の番組が流れるようにする。

まあ、録音であったとすれば、CDでもMDでも…メディアに入れたものを流すようにすれば良いだけだが、それだと、信憑性が皆無だ。

ただの悪戯の域を出ない…とにかく、わかりやすく行方不明になつて何かをする必要があった…というわけだな…彼は。

それに選ばれたのが…ラジオってわけだ…。

「貴女が聞いたラジオの電源はご自身で入れましたか？それとも自動で…？」

「えっと…いつも、タイマーで動くようにセットして、同じ時間に同じ局が流れるようにしています」

「ニュースか何かですか？」

「音楽番組…ですけど、聞き逃したくないので…ちょっと早めにタイマーしてます…ニュースの最後の部分が聞き取れるくらいですけど…」

「彼は、そのことを？」

「知っていました…いつも同じ時間に動くことで、文句も言われませんでしたし…それが何か関係が？」

なるほど…これで…話は大方繋がった…。

「ええ…関係あり…です」

さて…どうやって説明をしたものか…。

「彼には、彼の事情があるようです…そして、彼としては、現在、できるならば貴女に会いたくない…と、思われます…嫌っているという意味ではありません」

「そんなことが、何であなたにわかるんですか!？」

「多分…すぐにわかると思います…が、とりあえず、後で彼の方に、聞いてみますので…今日は、一旦帰っていただいたほうが…」

「…わかりました…」

いまいち納得のいかない表情だが：まあ、後で、詳しい話を知らせれば、納得して：くれると思うんだが：。

そう思いながら、帰路につき女性を送り届けてから、再び廃ビルに向かつて車を走らせた。

「さっきのラジオの話はなんだい？」

お前は：知っているんだろ？：偽ニュースが、彼女の部屋で流された：って事さ。

しかも、時間的な違和感も無く：な。

「で、何で、そのニュースがあんたのところで流れたんだい？」

さあな：？距離的に考えても、俺のところでそのニュースが流れる可能性は、ほぼゼロなんだがな。

そもそも、その時偶然聞いていた局は、ガチガチのニュース番組だったよ。

「へえ、ニュースを聞いているとは殊勝なことだね」

暇すぎてな：一眠りするには、ニュースを聞くのが一番さ。

「子守唄代わりか：ところで、これから行く、『行方不明者』に何を聞くんだい？」

まあ：あの女性にいけない話を：かな？：もちろん女性には伝えられる部分だけ伝えるが。

「そうかい？：まあ、物分りの良さそうな娘さんだからな：行方不明の真相だけでも喜びそうだ」

やっぱり：何か知っていて、けしかけていたな：？

「それは：企業秘密だって言っているだろ？」

6章：真実に向けて。

とりあえず、お前はここで待っていてくれ…すぐ戻る。

「夏場だったら拒否しているところだな…まあ、気長に待ってるよ」
いつもみたいに寝ていれば直ぐだろ？…じゃあ、行って来る。

先ほど後にしたビルの裏口に向かい、インターフォンを鳴らす。

「誰だ…？」

さっきと同じ男の声だな…。

「先ほど、来ました…探偵のものです…智子さんには先に帰っていただきました」

「…さっきの？…あんた、何を知っているんだ！？」

「多分…何も知りませんよ…？少なくとも、貴方が何故、行方不明になる必要があったかっていうことは知りません」

当たり障りのない会話…とでも言おうかね？

とりあえず、色々と聞きたいことはあるんだが…事を急いても良い事はないだろうし、

車の方で待っているあいつは…まあ、放っておいても問題はないだろうしな…。

「…智子には黙っていてくれるなら…事情を話す…だが、あんたの知っていることも聞かせてもらう…それでいいか？」

…随分と、話のわかる人のようだね？…こういう人ばかりなら仕事も楽なものな。

「わかりました…私の方で、勝手に調べさせて頂いた事で話せることは話しますよ」

そういうと、程なくして、ドアが開き、ビルの中へと招き入れられた。

そこに居たのは、依頼人から預かった、「代わったオーナーの写真」の男だった。

：第一印象は、廃ビルと呼ばれている割りに、綺麗に清掃されているし、装飾品などにも、

目立った汚れはない：いや、ちょっとしたホテル並みに改装されている：そう言っても過言ではないのかもしれないな：。

それくらい、屋内は綺麗にされていた。

概観からは、少し想像できないような内装だね：。

「廃ビルになっている聞いていたんですが：随分と綺麗ですね？」

「うん？：ああ、これも、智子には黙ってもらいたいことの一部だね：順を追って話させてもらうんだが：時間の方はあるか？」

「ええ：気の長い連れを待たせていますが：まあそれなりに時間には余裕がありますよ」

一応、あいつのことも気にかけている振りくらいはしておいても損はないだろう。

：まあ、得もないだろうが。

「連れがいたのか：ん？さっき智子ときたときも、一緒にいたのか？」

「まあ：近くまでは来ていたと思いますよ：結構人見知りする奴なんですよ」

「そうか：とりあえず、簡単に説明するとだな：」

そう言って、今回の行方不明の経緯と、色々と謎になっていた部分の解説をしてくれた。

まあ、大方のところは予想通りだったのだが、ひとつ気になるころがあったので聞いてみた。

「前のオーナーの姿を見たって言う話を聞いたのですが：心当たりは？」

まあ、これだけ種明かししてくれたんだから、この程度の質問くらい答えてくれるだろうと、軽い気持ちで聞いたのだが、彼は表情は見る見るうちに暗くなっていった。

「：やっぱり、見たって言う人間がいたのか：？」

絞り出すような声でそれだけ言って黙ってしまったので、それ以上聞くことは辞めておこう…。

色々と厄介ごとに巻き込まれる可能性もあるからな。

「わかりました…とりあえず、今回話した事は伏せておいて、話せる部分だけ智子さんに話してもよろしいですか？」

「…話せる部分？…例えば？」

「そうですね…偽のラジオ放送とか…そもそも行方不明でなかったこととか…まあ、それをやった理由については、隠しておきますが」「そうだな…その辺の話なら問題…ないか…あんたと、智子が納得できるのなら、話してもらっても構わないが…くれぐれも」

「ええ…わかっていますよ…やり方は、とにかくとしても、やりたいうこと自体は、良い事だと思いますし、応援させていただきますよ」「…ありがとうございます」

必要な分は聞きだしたが…やはり、前のオーナー…一体何なんだろうね？…彼の顔色の变化からして、あまり良い事ではない気がしてならないが…。

それにしても…話し込んだというわけでもないのに、結構な時間がかかったもんだな…あいつの待ちぼうけは今に始まったことではないが…土産のひとつでも買っておくかね…？

そう思いながら、近場のコンビニで手ごろな食料を買って車に戻った…が、寝てるといったが…まさか、ここまで爆睡しているとは思わなかったね。

後部座席で、大の字で寝ている…全く気楽なもんだ。

「ん…？ああ…早かったな…？」

別に早くないぞ…時計をしてみる。

「…ふ…ん…結構時間かかったんだな…で？」

首尾は上々…ってところ。

ほぼ結論めいた部分は見えたんだが…。

「前のオーナーは謎のまま…ってか？」

まあな…ま、そっちの結末が、お前が面白いつて言っていた結末のようだな？

「さあ…それはどうだろうね？」

もったいぶつていても…まあ、そのうちわかるもんなんだろ…その結末は？

「ま、あんた次第だな…」

7章：準備。

さて…どのように、依頼人にどうやって伝えたものかね？

「言うなって言われたこと意外を全部説明すればいいんじゃないのか？」

そうなんだがな…話せない部分のほうが多すぎて、どうにもこうにも…。

「そうなのか？…まあ、僕は、何を聞いてきたのか知らないけど…」
まあ…お前に話す分には問題ないか…。

…って言うことなんだ。

「…確かに…話せない部分のほうが多いね…どうするんだい？」
それが、決まらないから困っているんだろ？

…まあ、明日まで時間もあるから、それまでに何とか出来ればいいんだけどな。

「じゃあさ、彼の使った方法を、君も使えばいいじゃないか？」

…ラジオのやつか？…どうやって？

「君のつてを使って…まあ、僕が手伝ってあげてもいいけど、彼をあのビルから引っ張り出して、彼女と直接話をさせれば、君の役割は終わりさ」

…ちよつと強引だが…確かに、俺が解決するような問題でもないしな。

あの、屋内の改装具合も含めて、実際には二人だけの問題だ…。

「そういうこと」

…ところで、ちよつと良いか…？

「なんだい？」

…いくつか聞きたいことがあるんだ。

「簡潔に願いたいね？」

ああ…彼女から預かった写真の彼は、新しいオーナーなんだよな？

「まあ、見ての通りだろうな」

…確か、お前は、「代わったオーナーは、行方不明」だって言っていたよな？

「今思い返すと…そう言ってたな…そして、それは言い方がおかしい…と？」

ああ…お前は、このことを知っていた…ってことで良いんだよな？

「まあな…まあ、あのビル内にいるかって言うことについては知らなかったがな？」

そうかい…あの会話をたぐるとだな…とてもじゃないが、依頼人の探していた人物が、行方不明になったオーナーだったとは繋がらない…何せ口振りが最近ではなく、もっと前に行方不明になったみたい…、

「そう思うのは、あんたの勝手さ…僕は、いつ行方不明になったか？…なんていうことは、言わなかったし、聞かれなかった…違うかい？」

…それは最もだな…聞いたところで教えてくれたとは思えないが…？
それと…前のオーナーの件なんだが…？

「前のオーナー？…ああ、彼が目撃したって言うやつの話かい？」

…お前じゃないのか？

「おいおい、冗談をよしてくれよ！…こんな背格好の奴が出来ると思うかい？」

普通なら、出来ないだろうな…でも、お前ならできるだろ…？

絶対的な確証って言う奴は無いが…。

「まあ…出来なくは無いよ…」

まあ…それだけ聞ければ十分だな。

俺は、依頼人に連絡を取り、彼から聞いた情報について伝えることを約束し、いくつか確認したいことを来た後、

翌日に、今一度、事務所の方に来てもらう事をお願いした。

一応、今回の料金についても多少説明する旨を伝えてから連絡を終

えた。

電話を終えてから、こいつとの打ち合わせを行う。
彼をあのビルから引っ張り出して、2人で直接話し合う場を設けて
しまう作戦の為だ。

彼女は、行方不明になってから、何度から連絡していた…が、彼か
らの反応は皆無だった。

状況が状況だったからかもしれない…。

なので、今度は、彼自身が使った、ラジオ放送のやり方をどうにか
真似る事とした。

先ほどの電話で、彼はラジオとかは持っているのか？ということ
を聞いたが、

どうやら、それらしいものは持っていないらしい。

あの時、部屋を見渡した限りでは、館内放送のスピーカーがあつた
くらいか…？

「ちょっと悪いんだけど、ドアを開けてくれないか？」

…自分でやれよな？

「…できれば苦勞しない…分かってていつているだろ…？」

いつもみたいに…あっちから帰らないのか？

「窓かい？…入るときに良いんだけどね、出るときには、あんまり
良くない。

それに、ドアを開けてくれそうな人間がいるんだから、利用した
ら？」

全く…人をドアマンみたいな扱いしやがって…明日の時間は大丈夫
か？

「僕は、常に暇をもてあましているのさ…来るなって言われても、
来てあげるさ」

じゃあ…今日と同じくらいで頼む…明日できっと、蹴りが付く…は
ずだからな…。

「そうだと良いね…じゃあ、また明日」

…そう言っ、あいつがでて行った後に、早急に翌日の準備に取り掛かる。

必要なものは、館内放送を直接いじれるものの方が良いが…最悪の場合、別の方法もとらなければならないな…。

彼が使った、ラジオの方法…あれは無理だ…確実性が低すぎる…。

…そうだ…あの方法なら…。

そう思い立って、再び依頼人の方に連絡を取った…これから言う内容の文章で、彼にメールを出してもらおうように促した…。

8章…誘導。

準備は出来たし…後は、実行するだけだな。
とりあえず…あいつが来るのを待つか…。

「おい、ちょっと、開けてくれないか」
ん？ やっと、到着したか…。

「明けといてくれたっていいじゃないか…来るのわかっていたんだし」

窓からの出入りをやめればいいんだよ…正面のドアなら、鍵をかけたいないぞ？

「ったく…それができたら苦労はしないね…で、準備の方は？」
おおよそ…多分、問題ないと思う…多分な？

「ふくん…それならいいんだが…で、僕は何をすればいいのかな？」

とりあえず、2つやって欲しい事がある…大分、ややこしいし、面倒なことなんだが…。

「…3食な？」

うまくいったら、報酬は、山分けだから、3食以上は出せるぞ？

「そんなに貰っても、困るんだがな…まあ、仲間にも恵んでもらうって事で…」

わかった…じゃあ、とりあえず説明するぞ…まず…。

…あいつに任せておけば、とりあえずは問題ないよな…ひとまず、あのオーナーを引っ張りだすとするか…。

彼との約束を反故することになるんだが…まあ、依頼者を優先するのがベンリ屋としての仕事だしな…。

俺がやったことは非常に簡単なことだ：まずは、依頼人の女性が行方不明になったということを彼に伝える。

前日の夜に、彼女が俺の指示通りに彼にメールをしていてくれれば、恐らく信じてくれるだろう…。

その後の行動は：彼任せになるが、事務所のほうまで一緒に来てもらえれば、それで解決：だな。

うまくいけばいいのだが…。

「すみません：昨日、来た探偵のものです…」

インターフォンを鳴らし、中の反応を待つ。

「あんたか！？：ちようど良かった：昨日、智子から、メールが来て…」

「ええ：その、智子さんのことで少しお話があつて、来ました…」

依頼者に送ってもらったメールは、この：山上さんだったか？が、依頼者に送ったメールと似たような内容に送ってもらった。

『用事が出来て、しばらく連絡が出来ません』

こんな感じのメールのはずだ。

このメールに、この人がどれくらいの反応を示すかが気になっていたが、

思ったよりも、大きく反応を示してくれたようだ。

部屋に通されて、俺が一番最初に言った台詞は…。

「智子さんに、連絡が取れなくなりました：何かご存知ではないでしょうか？」

行方不明になったと伝えられればいいが：それだと、かえって怪しまれそうだしな…。

「そうだったのか：変なメールが届いたから、心配なのだが…」

「変なメールですか？」

「ああ…『しばらく連絡が出来ない』っていうメールが：最初に、

出したのは、俺の方だったのだが……」

「そうだったんですか……それに関して、何かご存知のことは？」

「いや……むしろ、こっちが聞きたいくらいだ……」

「そうですか……こちらにも、依頼を受けている身ですから、依頼者については、全力で探しますが……」

そういいかけたところで、彼の携帯電話が鳴った……その着信の名前を確認して彼が驚いた表情のまま固まり、こっちに眼だけをやって口を動かした。

「……智子からの電話だ……」

どうやら、依頼者からの電話だったようだ……ここまでは、ほぼ計画通りだな。

「ちよつと、電話に出てくる……失礼」

彼は、部屋から出て行った。

あいつに頼んだ最初の方は、俺の代わりに依頼者と会って、依頼者から電話を借りて、彼に電話をかける事。

誘拐犯か何かかと思わせて、彼をこの部屋から引っ張り出すのがメインだからな。

もう一つの方は、俺が、一回事務所に戻らないといけないから少し面倒なんだが……。

「……あんた……何か隠していることがあるんじゃないか!？」

戻ってくるや、すごい剣幕で詰め寄ってきた……あいつは何を言ったんだ……?

「ちよつと……まずは、落ち着いてください……さっきの電話は智子さんからだったんですよ?」

「番号自体は……確かに、智子からの電話だ……だが、相手は、声の高低……別の女性からだった……」

女性……ね。……まあ、あながち間違っていないかもな。

「そうですか……それで、それが何故、私が何かを知っていると?」

「『昨日来た探偵に聞け』って言っていた…何を知っているんだろ！？」

…あいつ…そんな事言ったら、変な疑いかけられるだろうが…。

「と、とにかく、落ち着いてください…直接の依頼者です、関係ないとも言いきれませんが、智子さんに連絡取れないで困っているのは私も同じですから…」

「あ…そうか…でもなんで、電話の人は、あんたが知っているような事を…」

「それは…わかりませんが、とりあえず、1回私の事務所のほうに来て見ませんか？」

「…わかった…」

「すぐに出れますか？…今日は、車で来ていますから」
「準備するから…少し待ってもらえるか？」

首尾よくビルから引っぱり出すことは成功したな…ひとまず、事務所に連絡をしなければな…。
準備にどれくらい時間がかかるかわからないが…簡潔にしないと…。

「やあ、そっちの首尾はどうだい？」

一応、ビルを出ることになったよ。

「それは良かった…で、次は何をすればいいんだい？」

とりあえず、帰るまで隠れていてくれ…外にいられば、連絡も出来るから好都合なんだが…。

「了解…じゃあ、近場の喫茶店で、依頼者とデートでもして来るよ…好みのタイプじゃないけど」

依頼者の前でそういうことを言うなよ…つと、彼が来たから切るぞ。

「ハイハイ…じゃあ、後で」

「どこからの電話だ？」

「いや、ただのいたずら電話みたいなものですよ」

「いたずら電話…?…それは大変だな?」

「まあ、職業柄、色々な所に広告出させてもらっていますから、仕方ないですよ…」

「そうなのか…」

「まあ…もう慣れましたよ…じゃあ、事務所のほうに行きますか?」

「よろしく、たのむ…」

9章：最後の仕掛。

「…そういえば、ひとつ聞かせてもらってもいいですか？」

車の移動の最中、そう口を開いたのは俺のほうだった。

…まあ、沈黙に耐えかねて…っていうところもあるんだが…。

「…なんだい？」

「…確か、あのビルの裏口は、外側から開かないような構造になっていましたよね？」

「…確かに、外部の人間には外側からは開けられ無いようになっている…」

「外部の人間には…？」

「…あまり、人に言うことでもないんだが…マスターキーを差し込めば、外側から扉を開けることができるようになってるんだ」
「…そういうながら、鍵らしきものをとり出して見せてきた。」

「なるほど…管理人であるあなたは、出入りができる…そういうことですね？」

「ああ…そういうことになるな…」

「…状況が状況とはいえ、ビルから連れ出してしまっていますからね…戻れなくなると大変かと思ひまして…」

「…確かなに…だが、話したとおりだから、まず問題は無い…それよりも…」

「智子さんですね？」

「…ああ…」

そんな話をしながら、ようやく、事務所についた。

そのタイミングを見計らったかのように、あいつから電話がかかってくる。

「あっ、すみませんちょっと電話で…事務所は、このビルの3階にありますから、先に上がっていてください…鍵が…」

鍵を山上さんに渡し、上がっていく姿を確認してから、電話に出る。

「ついたみたいだね？」

どこで見ているんだ？…タイミングが良すぎるだろ…。

「結構、近く…かなあ…？…で、僕はどれくらいで動けばいいのかな？？」

そうだな…10分後に、さっき言ったとおりに来てもらえるか？

「10分…ね、彼女のほうはどうする？」

一通り終わってから来てもらう…今は、喫茶店か何かか？

「まあ、そんなところ…1〜2時間くらい滞在しても文句は言われないところさ」

そうかい、それは助かる。

「僕の行きつけで、顔も利くしね」

…そんなところがあるのに、俺にたかっているのか…まあ、首尾よく頼む。

「…彼女の電話はどうする？」

そうだなあ…お前が持ってきてもらうと、助かるんだが…連絡が取れなくなるんだよなあ…。

「それなら、この店に直接かければ良いんじゃないのかな？…話は通しておくからさ？」

わかった…その辺は、お前に任せておく。

「了解…じゃあ、10分後に…」

先に上に上がった山上さんは、事務所の前で待っていた。

「先に入らなかったのですか？」

「…どうにも、気が引けてな…」

「そうでしたか…かえって、気を使わせてしまったすみません」

「いや、俺が勝手に待っていただけだからな…」

そんなやり取りをしながら、事務所の中へと、山上さんを促し、少

し会話を開始する。

「…非常にいいにくいことがあるのですが…聞いてもらえますか？」

「…改まって…なんだい？」

「先日、前オーナーが、あなたのところに来ていたという話をしたかと思いましたか？」

「その話は、やめてくれないか!？」

「それが、そうも、いつてられない状況になりましたね…実は、私のところにも、そのオーナーが来たんですよ…」

「…本当なのか？」

山上さんの顔を伺いながら話を進める…とりあえず、この内容の話への食いつきはいいみたいだな…後は…うまくいくか…だが。

そういいながら、さりげなく、ラジオの電源を入れていつも聞いている放送局にあわせる。

「…何をしているんだ?…オーナーの話は??」

「つと…すみません、この時間は、ニュースをなんとなく聞きながらすごすのが日課なものでして…確かに、前のオーナーと思われる人はここに来ました…」

「そんなはずはない…!」

ザツ…ザザツと、少しラジオの電波の受信が乱れた跡にニュースのキャスターの声が変わったかのように聞こえ、それがニュース以外のものを読んでいるように聞こえた。

「あのビルは、昔からテナント入れてやっていたのに、いまさら改装して、マンションみたいにしても入居者なんて出るものかね…私には、わからんよ…」

その声を聞いたときに顔色が変わっていき、声の主の台詞が終わった後に、同じようなノイズが入り、元のニュースに戻ったときには傍目にも体調が悪いことがはっきりとわかるほどになっていた。

…少しやりすぎたかもしれない…。

「…今のニュース…何かおかしかったですよ…壊れたのかなあ

…?」

「…あんた…本当に、何も知らないのか…!?…今の声は前のオーナーじゃないか!？」

山上さんが、声を荒げながらこっちに詰め寄ってきたときに、インターフォンが鳴り響く音が聞こえた。

…ちょうど時間か…タイミングがいいな、あいつも…。

インターフォンの音に、びくつとなった山上さんの横をすり抜けて、玄関の方に行き、扉を開ける。

そこには、前オーナーが立っていた…流石に、わかっていたこととはいえ、驚いたな…入れ違いで俺は、

「誰もいないですね…ちょっと、外を見てきますので、山上さんは少し待っていてください」

そう言って、前オーナーの肩を叩き、

「後は任せた」

そう言って事務所の外に出て、本来の依頼人のいる喫茶店の方に足を運ぶ。

…まあ、これで、大方解決になる…のかなあ…?

タネがばれる…ことはないだろうけど、万が一ばれたら、後々厄介だが…まあ、何とかなるか…。

「ここって、変わった喫茶店ですよね…」

「ええ、あいつの行き着けて言うことも含めて、結構変わったところだと思います」

依頼人の向かい側に座りながら、現在、事務所のほうに山上さんがいることを話し、ある程度時間が経ったら、先に事務所に向かってもらうことを了承してもらった。

…それにしても、行き着けの店が猫喫茶って言うあたりもあいつらしいな…ここの店長は、あいつのことをどれだけ知っているのやら…。

「…ところで、あの、その…ひとつ聞いてもいいですか？」

少し言いくるそうに、依頼人が口を開いた。

「山上さんのことですか？それは、後で本人に…」

「いえ…そっちではなくて、あの、あの女性と、探偵さんの関係って…」

女性…？…ああ…あいつのことか…なんて説明すればいいんだろ…？

「腐れ縁とでも言いますかね…時々、ふらっと事務所にやってきて、飯をねだって来る感じですね」

「なんか…近所に住み着いている猫みたいですね…」

「まあ、そんなもんですよ…後は、時々、仕事の話をどこからか仕入れてきますし…っと、これは極秘事項ですので詳しくは話せませんが」

「そうなんですか…そういえば、あの方のお名前ってなんていうんですか？…なんか、さっきは聞きそびれてしまっただけ…」

…そういえば、俺も良く知らないなあ…適当に答えるか…まあ…それでも問題無いな。

「え…っと…確か、翔って名乗ってましたよ…詳しく聞いたこと無いので、それ以外はちょっと知らないのですが」

「シヨウさん…ですか？…なんか、男の人の名前みたいですわね…？」

「まあ、相棒の呼び名みたいなものだと思いますよ」

…そういうことになっておけばいいだろう…。

時間が経ち、あいつからの連絡が入る。

「こっちは終わったよ…そっちに戻る？」

いつもの姿で…な？

あと、電話は、車のボンネットの上にでも置いておいてくれ。

「了解」

「まずは、先に、事務所に戻ってください…山上さんは…多少混乱しているかもしれませんが…」

「…何かをしたということですか…？」

真剣な目つきで言われた…ごまかしは効かないな…。

「詳しくは話せませんが、あなたが受けたラジオと同じような手法をとらせてもらいました…偽放送を流させていただきました」

「…それだけ…ですか？」

「…ちよつとした、催眠療法とも言いますか…彼の知っているある人に会ってもらいました」

「前…オーナーって言う人ですか？」

「まあ…そんなところですよ…そういうことです、大分混乱しているということが予想されますので…」

「…わかりました」

いまいち、納得しきっていない感じがあるが…これじゃあ、依頼料をとることも難しいかなあ…？

そう思いながら、事務所のほうに向かって歩き出す依頼人を見送り、あいつが帰ってくるのを待つことにした。

10章..『翔』とマスター

お疲れさん。

「：ホントにね：アレは、かなり疲れるから、あんまりやりたく無いんだよね」

まあ、そういうなって：オーナー、こちらの女性に冷たい飲み物を。

「気が利いているじゃないか：でも、何にも出ないよ？」

まあ、労いってことで：で、依頼者は？

「事務所向かう姿は確認したよ」

そうか：で、彼の方は？

「うーん：ちょっと、やりすぎちゃったかも？」

：後で、文句を言われるのは、多分：俺だぞ？

「まあ、経営者の責任って事で、諦めてよ：ハハッ」

笑い事じゃないんだけどな：あつ、そうだ。

「ん？他にもなにかあったかい」

お前の名前、『翔』になったから。

「なったからって：既に、決定事項なのは、どういう事だい：？」

依頼者に、その名前を聞かれて、とっさに紹介したからな：まあ、諦めてくれ。

「不満が無いわけじゃないけど：まあ、そういうのには慣れているし：拝領しておくよ」

そうかい：それは、よかった。

「：で、僕らはいつ戻るんだい？」

そうだな：ある程度話がつけば、すぐにでも戻りたいんだけどな：。

「ふーん：オーナー呼んでくれるかい？」

そんなの、自分で：って、今は、他の客もいるから無理か？

「大声は、ちょっと出せないかな？：っと、呼ばなくても来てくれたみたい」

タイミングが良かったな：注文したミルクだな？

「冷たい飲み物は、これに限るからね」

「待たせたな、お嬢」

マスターは、そう言いながら、翔の前にミルクの入った皿を置く。

「お嬢は、辞めてって言っているだろ？…で、マスター、また、頼みがあるんだけど…」

「…『伝言』か？」

「うん、場所は、このオッサンの事務所」

…俺は、オッサンか…。

まあ、あんまり気にしないで良いか。

この二人の会話は、いつも珍妙だが、いい加減慣れてきたな…。

「旦那の事務所か…2〜3分ってどこだな」

「じゃあ、オッサンのツケで…このミルクもね」

「毎度あり」

オーナーは、そういうながらこちらに視線を向けてきた。

「俺の受けた仕事でもあるから…まあ、報酬の方から必要経費として払わせてもらおうよ」

「ミルクも必要経費かね？」

「うーん…設備投資ってところかな？」

「…僕は設備じゃないよ？…まあ、ということだから、マスターよろしく」

「わかった、戻ってきたら、領収書持って来るから少し待ってくれ」
そう言って、マスターは席を外した。

…ところで、あの人とお前の関係って何なんだ？

「うーん…ちよっと、説明が難しいかなあ…あんたからすれば、ちよっとした同業者かな？」

同業者…？

「僕みたいなのを使役しているというかね…そういう点では同業者

「まあ、僕自身が使役されているとは思わないけどね」

使役：ねえ、お前は自由に動き回っているからな：って、ちょっと待てよ：ここの喫茶店って。

「まあ、お察しの通り：というより、結構前から気づいていたんじゃないの？」

「まあ、お前とあのマスターとのやり取りを見ているしな：そういうええ、何で、『お嬢』なんだ？」

「：僕が聞きたいよ」

「：お前も、苦勞していたか：っと、マスターが戻ってきたみたいだな。

「お待ち、お嬢：とりあえず、旦那の事務所には、男女一組が居て、
凶悪：ってわけではないが、沈黙しているみたいだな」

「なるほどね：ありがと、マスター」

「こっちも、商売だからな：旦那、コレな」
マスターから請求書を渡される：まあ、経費で落とさせてもらうことにしよう。

「とりあえず：コレで、釣りは：コイツが来たときにでも、適当に使って構わないから、今日の分の領収書もらえるかい？」

「そういいながら、請求書の額より多めに現金をマスターに渡す。

「毎度あり：名前は、いつも通りで？」

「ああ、よろしく：っと、もう出るから、領収書はカウンターの方で受け取るよ」

「了解：じゃあ、こっちへ：」

「：ご馳走様」

ん？礼を言うなんて珍しいな？

「今日の分じゃなくて、次回以降の確約に対するお礼の先払いってやつかな？：感謝はすぐ忘れる性質でね」

まあ、それもそうだな：裏のないものとして、素直に受け取ってお

くとするさ。

「僕は、もう帰って大丈夫かい？…流石にちよつと疲れてさ」
そうか…色々は無茶言つて悪かったな。

「いや、いいよ。…最初に話を持ちかけたのは僕の方なんだし」
そういえば、そうだったな…まあ、今回の件は、もう蹴りもついたし…明日にでも、事務所に顔を出してくれよ。

「了解…じゃあ、今日はとりあえず帰るね」

…そういえば、帰るって何処に？

「…そういう野暮なことは、女性には聞くもんじゃないだろ？」
ははっ、それもそうだな、じゃあ、また明日な。

「うん、また明日」

最終章：事件解決

ピンポン…。

事務所のインターフォンがなされる音が聞こえる。

その音に目を覚まして、近場の時計に目を向ける…事務所を開ける時間よりも大分前だな…。

まあ、個人業に、そういう時間感覚は必要ないかな？

ついで、ドアを開ける音が聞こえてくる…鍵を閉め忘れたのかな？

「『明日来い』って言っていた割りに、まだ寝ているなんて…自由な仕事なんだね…やっぱり」

そう言って、事務所に入ってきたのは、昨日まで仕事を請けていた依頼者の女性だった。

…『翔』頼むからそれを身近な人を使ってやるのはやめてくれないか？

「あら？…もう、僕だつてばれちゃった？…色々ということを考えていたんだけどなあ…」

昨日の、アレを見聞きしていないからな…お前は…はあ。

「『昨日の？』…あんたが、事務所に帰った時にでも何かあったのかい？」

…何かって言うもんじゃないな…マスターの言っていたこと覚えているか？

「えっと…『陰悪ってわけじゃないけど沈黙している』ってやつ？」

それ…それなんだけどさ…マスター状況言わなかっただろ？…事務所に付いたら驚かされた。

「…何があつたんだい？」

翔を見送った後、俺は、事務所へと向かった。

結局、二人を引き合わせた時点で、依頼者からの依頼はこなしたことになるんだよね…。

まあ、依頼対象の『山上さん』にはちょっと悪いことをした形になってしまったけど。

「あなた…あんな短いメールだけで、姿を消すなんて何を考えているのよ!？」

…事務所のドアに近づいたときに聞こえてきたのは、依頼人である、『智子さん』の声だった。

あのマスターの話だと、確か、沈黙していたって言うはずだけど…？

事務所のドアを開け、中に入るとそこに繰り広げられていたのは…荒らされた事務所…強盗でも入ったのか!？

それも大変なことだったのだが、智子さんが仁王立ちで、手には何も活けられていない事務所の花瓶。

そして、その足元で、土下座の形で頭を下げている山上さん…とりあえず、強盗犯は、すぐに判明したのは良かったが…。

その状況を呆然と眺めることになってしまった俺に気づいた智子さんは、大慌てで花瓶を事務所の机において頭を下げる。

「す、すみません!」

その言葉でわれに返った俺は、とりあえず、事務所内の惨状を改めて確認してから、再び二人の様子を見てから、

「…とりあえず、何があったのかを片付けを手伝ってもらいながらも、聞かせて頂いて良いですか?」

元々、片付いていたわけでもないから、徹底的に散らかった状況に陥って、やっと片付ける気力が出たことは感謝しておこう…そう考えよう…。

この状況に至った経緯をかいつまんで行くと、事務所に近づいた時

に聞こえてきた声に集約されるらしい。

『前オーナー』効果で、やや錯乱気味だった山上さんが、まずは部屋を荒らした：実行犯は二人だったということか：原因作ったのは俺か？

そして、智子さんが事務所に着いた時点では、まだ落ち着いていなかった為、一発ひっぱりたいらしい。

：良く見ると、山上さんの頬が赤くなっている：叩かれたのか：。落ち着いた後、山上さんに失踪の真相を聞きだしにかかったものの、いまいち箇切れが悪い答えしか出てこないのに苛立った智子さんは、近場にあった書類を投げつけながら、事件から今までの不満をぶつけたらしい：うちのものでやるのはやめてほしかったね：。

で、その言葉の最後に出たのが、事務所の外で聞いた声だったと：花瓶を投げつける前にたどり着いてよかった：。

流石に、殺人事件がおきたような事務所だけは長く使いたくないしね。

「：話はわかりました、事務所についてはきれいに片付けましたし、幸い、必要なものに被害はありませんでしたし：」

「本当に、すみません！：あなたは：しばらく、そのままでもいいわよね？」

そういいながら、山上さんに視線を向ける。

「：はい：すみません」

：あれ？ビルに行った時と、ちょっと態度が違う：？

「実は：この人が、行方をくらますこと自体は、珍しいことではないんです：ただ、今回だけは、ちょっと別の事情がありました：」

：別の事情：？

「その：別の事情って言うもの：差し支えがなければ教えていただけますか？」

…で、お前は、その事情って言うのも知っていたというわけだな？
「え？僕？？」

ああ…依頼人の女性が、実は妊娠していて、それを伝えようと思っ
た矢先の行方不明事件。

いつもなら、気にも留めないような、婚約者の行方不明でも今回は
特別だった…と。

「うーん…確かに、行方不明になったって言う事件について持って
きたのは僕だけど、妊娠については昨日知ったんだよ？」

昨日…？でも、彼女は、自分から妊娠していることを告げたわけで
はないって…。

「まあ…一言で言えば…僕だからわかったって言うことかな？…ま
あ、なんとなくわかるって言うレベルでだけど」

なるほどな…なんか、そういうされると、そうだとしか言いようがな
いもんな…おまえ自身が。

「人聞きの悪い…で、結局、依頼者の人はなんて言ったの？」

まあ、こういうときは女性の方が強いんだろうな。

子供が出来たこと自体は不安がなかったわけでもないらしいんだけど、
『新居』が用意されはじめていることを聞いて喜んでいたくら
いだ。

…山上さんは、結婚まで黙っておきたかったみたいだけど…まあ、
どっちにしても…、

「そんな長い期間はだませないだろうね」
そういうことだな。

「…で、依頼料の方は取れたのかい？」

状況も状況だったからな…正規料金にちょっと割り増しくらいもら
えたよ…ほら。

「領収書…ね…おお、結構な稼ぎになっているだね…人件費あん
まりかかっていない割りに」

…おまえなあ…マスターのところの『伝言』って、案外高いんだぞ
…お前は知らないだろうけど…。

「まあ、僕にとっては、お金自体は何の意味も持っていないからね
そうか…まあ、それもそうだな。」

「何にせよ…コレで、事件は解決って言うことでいいのかな？」

まあな…山上さんが、『ビルの屋内改装してマンションにしようとして
いる』って言うのが伝わったわけだし…それも本人の口から。

「…色々と仕込があっただけだね」

その辺も込みで、お前のおかげだな？

「ほめても何にもでないよ？」

それもそうだな…じゃあ、どこか食事にでも行きますか、お嬢さん？

「…あんたが言うのと、気持ち悪いよ？」

気にするな…俺も、そう思っている。

「…自覚症状はあったんだ…まあ、食事かぁ…そういえば、ちょうど、
また面白い話があるんだけど…？」

その面白い話っていうのは…。

「…もちろん、僕がいちばん面白くなる話さ！」

エピソード（前書き）

…依頼された仕事から数日後。

エピローグ

「この間の事件が終わってから、最近、事務所に居なかったよね？」
うん？…ああ、ちよつと、やることがあって、役所とか行っていたからな。

「…脱税でもばれた？」

…脱税して、得するだけの収入は無いことくらい知っているだろう？
「そういえば、そうだね…で、何しに行っていたのさ？」

ここの事務所のちよつとした変更…だな。

「…変更？」

ああ…事務所の名前を、『赤本探偵事務所』から、『ベンリ屋 翔』
って名前にな。

「…それって、あんたが決めた、僕の名前じゃないか！？…って、
赤本探偵事務所？」

ん？知らなかったのか？…まあ、俺も、結構どうでもよくなっていたからな。

「何で、『赤本』？」

…元々、この事務所は、俺ともう一人ではじめたものなんだよ…も
つとも、もう一人の方は、事務所に顔を出すことは無かったんだけ
どな。

「何で…？死んだとか？？」

無断欠勤後に、海外へと旅立っていった…自分勝手なやつだよ。

「ふ…ん…で、何でいまさら社名変更なのさ？」

…この間の事件の話を、お前が持ってくる少し前に、そいつが事務
所に来てな…コレを残して、またどっか行っちゃったんだよ。

「…『辞表』？」

『表』が『投票』の『票』になっているけどな。

「…本当だ…で、『赤本』の由来は？」

そいつが、『赤井』で、俺が『藤本』二人合わせて…。

「また、安直な名前をつけたもんだね…」

まあ…それ自体は、もう過去の話になった…今日から、ここは、『ベシリ屋 翔』だからな。

「…名前の使用料は高くつくよ？」

…今までどおり、暇なときにでも来てくれれば良いさ。

「ふうん…まあ、良いや、今日は、あんたの姿確認できたし帰る」
ちよっと待った、翔…今日から俺のことは、『所長』で頼むな。

「…めんどくさい…何か、得することでも…」

…タダ飯食べ放題…。

「『所長』…今後もうろしく」

ああ、よろしくな、『相棒』。

エピローグ（後書き）

この度は、『ベンリ屋 翔』を最後までお付き合い頂きありがとうございます。
ございます。

…当初と計画が変わったりして、かなりグダグダな作品になってしまったのは、プロットをしっかりと練らなかったことが原因であると反省しています…。

とりあえず、今回の物語は、コレにて終わりにします。

『ベンリ屋 翔』自体は、単発物の話として、こつこつと書いていかうかと計画しています。

…多分、メインが同じで話を毎回変えるような感じで…。

その辺の予定は未定ですが、もしお目に入ることがありましたら、お読みいただければ幸いです。

では、最後になりますが、改めまして…お付き合い頂きありがとうございます。
ございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9310b/>

ベンリ屋 翔

2010年10月15日17時37分発行